

プロローグ 思い出を探しに

「トン、トン、トン」

ハイヒールを履いた白く細い脚が石段を踏み、音を立てた。

「みなさん、着きましたよ。こちらは、カウアイ島で最も有名なポイプビーチです。今から一時間半の自由時間がございます。時間になったらここに帰ってくださいね。それでは、解散！」

ツアーガイドの大きな声が静かな海岸に響ひびいた。

ツアーガイドの後ろにほっそりとした女性が立っていた。薔薇色の頬ほらいろに、優美な眉ほほ、透き通った瞳と、その姿はまるで海から現れた精霊せいれいのようだった。その人は淡い水色みずいろの花柄はながらが散りばめられたドレスをまとい、瑠璃色るりいろのハイヒールを履はいていた。ビーチの石段いしだんへ向かって歩く足取りあしどは軽く、後から灰かすかな花の香りが広がる。そして潮風しおかぜに靡なびいた長くしなやかな黒髪くろかみを手で軽く直した。彼女はセレナだ。

セレナはかつて住んでいた場所をツアーガイドと共に訪れた。目の前に広がる景色は新



鮮なようで何か懐かしい気持ち^{ていぼう}がした。堤防
の階段に座ると、遠くの水平線^{すいへいせん}を眺め、ゆっ
たりと体を揺^ゆらした。

ポイプビーチには観光客がほとんどいな
い。雲一つない青空は眩^{まぶ}しく輝き、遠くの海
と空の境目^{さかいめ}は消え、白い雲と波の区別もつか
なかった。目の前には金色^{きんいろ}の光る砂浜^{すなはま}があり、
絵のように美しい景色が広がっていた。都会^{とかい}
の喧噪^{けんそう}から逃^{のが}れたこの小さな町で、セレナは
今までに感じたことのない穏^{おだ}やかで幸せな気
持ちになり、静かに目を閉じた。

突然、翡翠^{ひすい}の擦^すれ合^あう音^{ひび}が響^{ひび}き、セレナは我^{われ}
に返^{みおぼ}った。見覚えのある翡翠^{ひすい}と見覚えのある

姿、その人はそう遠くない階段に座っていた。

うすべにいろ ちどりこうし
薄紅色のTシャツに千鳥格子のショートパン

ツ、手にはスターバックスのレモン柚子ティ

ー、そして手首のブレスレットにある青緑色

の翡翠が二つ、目に飛び込んできた。セレナ

は稲妻いなずまに打たれたかのように啞然あぜんとし、目を

逸そらすことができなかった。しかし、その人に

目を向けられると、恥はずかしくなって海へと

目を逸そらした。顔に当たった潮風しおかぜが海の苦み

に溢あふれた時代へ導き、忘れていた記憶きおくを蘇よみがえ

らせた。



第一章 地獄の日々

じりじりと焼けるような太陽の下、海沿いの校庭でエリカとその友達^とはセレナ^{かこ}を取り囲んだ。

「どっか行ってよ！」

エリカはセレナの肩を強く押し、突き刺すような視線^なを投げかけ、

「あなたには、私達と一緒に遊ぶ資格は無いのよ！自分でも分かっているよね？」と軽蔑^{けいべつ}し

きった口調で言った。セレナは謝った。

「そうよ。隣にいただけで気分が悪くなる。あなたみたいなブスで頭の悪い人に友達なんかいるのかしら」

側にいたエリカの仲間も言った。

「ふっ。当たり前よ。だれも友達なんかに成りたくないわ。エリカが優しすぎるから、こうして邪魔してくるんでしょ」

もう一人は鼻で笑いながら言った。周りはいきなり
ばくしょう
爆笑した。

その中のたった一人の女の子が罪悪感を覚
えたのか、俯うつむいて両手りょうてを胸の前で合わせていた。





どれくらいの時間が経っただろうか。

「私と友達になりたいの？死ぬまで無理ね」

エリカはセレナの足を間違って踏んだふりをして背を向けて立ち去った。

「そうね。セレナのことなんか気にしないで。

気分を害がいしたかもしれないけど」

エリカきげんの機嫌を気にした仲間たちはすぐに追いかけた。セレナは頭を少し下げて、

「ごめんなさい」

と繰り返した。

セレナは耐えることに慣れていた。黙って我慢すれば過ぎていくことだから。このようないじな虐めは彼女にとって日常のことだった。

午後の英語の授業で、セレナは先生の質問
に答えられなかった。

「セレナ、お前の頭は金魚みたいに弱いな」

と悪戯いたづら好きなライアンは言った。

「ライアン、クラスメイトのことをそんなふう
に言ってはいけないよ」

先生が低い声で制止したが、無駄だった。

「幼稚園に戻って習い直すことをお勧めしま
すう！」

ライアンは続けて言った。教室は笑い声に満
ちた。セレナの頬は赤く染まり、頭の中で「チ
ーン」という音がした。

セレナがノートを取っている間、隣の生徒





は机を蹴^けり、音を立て続けた。それでも彼女はまた耐えることを選んだ。

休み時間になると、先生はセレナのノート
の字が汚いことに腹を立て、授業を真剣^{しんけん}に受
けていないと責めた。セレナは隣^{りん}の人のせい
だと思ったが何も言わず、ただ、

「先生。ごめんなさい」

と謝った。

「うわー！こんな汚いノートを取る人が本当
にいるんだ！」

先生が立ち去ると、エリカの声が教室中に響
いた。

「ごめんなさい。全部私のせいです」

セレナはつぶや眩いた。争うことが好きではないか
ら。



第二章 四つ葉の少女

翌日の休み時間、朝日^{あさひ}が窓から教室に差し込^さむ中、エリカの机の側をある女の子が通りかかった。少女の首には四つ葉^{よば}のクローバーのネックレスが輝^{かがや}いていた。

「ねえねえ！この質問の答え、教えてくれる？」

エリカは少女に声をかけた。しかし少女はそれに答えず、

「あのさあ、エリカ。私たち、あの子に対してやり過ぎなんじゃない？あの子、何にも悪いことしてないのに」

と言った。

「ふっ、あの子、いつも下ばかり見てるし、何にも話さないじゃない。変だと思わない？そういう人って、イジメられる^{うんめい}運命なんだよ！」

エリカは話すのをやめなかった。

「セレナにも良い所があると思うよ。セレナに優しくして友達になってみたら」

少女はエリカの話さえぎった。

「冗談^{じょうだん}じゃない！あいつとは相性^{あいしょう}悪いんだ



から。あいつはただの変人^{へんじん}じゃないか。友達
になりたければ、お前がなれよ」

ライアンの声が後ろから響いた。

「ねえ、ライアンが言ったことは聞かないで。

そうしないとセレナに付き纏^{つまと}われるようになるから。あのタイプの人とは付き合わない方

がいいよ。もし、セレナみたいな人と仲良く

なるなら、二度と私達の所に来ないで！」

エリカの口調は段々強くなり、少女^{こしょう}に反論^{はんろん}する機会を少しも与えなかった。

「ちょっとそう思っただけ」

少女は巧^{たく}みに返して、その場を立ち去った。

セレナはいつものように昼休み、一人で学校の一番上の階に上った。そこは彼女の秘密基地だ。屋上のプールは長い間、使われておらず、階段は埃ほこりで覆おおわれている。その階段の片隅かたすみで毎日昼食を食べていた。大きな窓越しに青い海や海岸へ打ち寄せる波を眺めたり、聞こえてくるかこないかの微かすかな海の音を聞いたりする。

セレナは海が好きだ。海の青さと静けさが好きなのだ。ここは人が少なく、誰にも邪魔されずに、静かな気持ちでいられる。

しかし、その日は違っていて、階段を上がっていくときに誰かが付いてきているような





気がした。しかもその感覚は初めてではない。
気のせいだと思った。自分のように空気みた
いな存在に時間を割く人はいない。突然、長
くて細い手が肩に置かれ、セレナは、ぎょっ
として振り向いた。

「あなたは誰？」

セレナは怯えながら言った。

「だれでもいいでしょ。エンジェルと呼んで。
一緒に話そう」

謎の女性は柔らかい口調で言った。セレナは
驚き、目は恐怖に満ちた。そして時間は凍り
付いた。

「分かりました。でも、私はつまらない人間で

す。私と一緒にいるのは時間の無駄ですよ」

セレナは自分を卑下^{ひげ}するように言った。

「そんなことはないよ」

ミスエンジェルは落ち着いた口調でそう言い、セレナの隣に自然に座った。座るとき、
胸元^{むなもと}に少しだけ鎖^{さく}のようなものが見えた。

「どうしてそんな格好をしているんですか？」

セレナは慎重^{しんちょう たず}に尋ねた。

「申し訳ないけど、しばらくは自分のことを言いたくない。こんな感じ^{せけんばなし}で世間話するくらいでいい？」

「この間、私に付いてきたのはミスエンジェルですか？」





「ああ、気づいてたんだ。何で昼ご飯のとき、いつも教室にいないんだろうって知りたかっただけ」

「私は一人でいるのが好きなんです。それに私が教室にいても、他の人の邪魔になるだけだから」

「そんなことないよ。私みたいに君の良さが分かる人が必ずいるよ！」

ミスエンジェルはセレナを励ますように言った。

セレナは昼食の間、とてもぎこちなく感じた。ミスエンジェルは暖かくて寛大だが、背すじを凍らせるような何かも感じさせる。二

たいしょうてき ふんいき
つの対照的な雰囲気とその空気を生んだ。



第三章 光の妖精ノラ

数日たった風が穏やかでよく晴れた日の午後、ポイプビーチの青空の下、黒光りするピアノがあった。赤いドレスを身にまとったノラの指先は黒と白の鍵盤けんばんの上で軽やかに踊り、背後はいごの風ないだ海の波なみの音を伴奏ばんそうにして美しい曲かなを奏かなでていた。そよ風は髪かみを靡なびかせ、髪の下にある繊細せんさいな顔かほを時々ときどき覗のぞかせた。その顔は美しく、非の打ち所がない。動きの一つ一つ

が自信に溢れ、まるでスポットライトを浴びているかのようだった。彼女は自分の世界に没頭し、ピアノの音色で物語を語るかのよう

に、熱心に演奏していた。

憂鬱な目とピアノの音色がセレナの心の琴線に触れ、深く魅了した。ノラという名には光、贖い、生命の源という意味がある。ノラのピアノの音色は上品で自信に満ちており、セレナの淀んだ水のような生活に喜びをもたらした。

セレナはノラを見つめ、彼女と話したい、あんなふうになりたいと思った。でも、それは絶対無理だとわかっていた。弾き終わると、





ノラはクラスメートに囲まれ、賞賛^{しょうさん}は止まら
なかった。

「すごいわ。ハニー。本当よ。世界中で君ほど
上手に演奏する人はいないわ」
エリカはノラを抱き締めて賞賛^{しょうさん}した。

「そんなことないよ」

ノラは控えめに言った。

「いいのよ。これは今まで聞いた中で最高の曲
よ！」

エリカは言った。

遠くからそれを静かに見ていたセレナは近
くへ行きたかった。しかし行けなかった。ノ
ラは友達が多く、クラスの人気者だが、ちょ

っと冷たい感じがして、ピアノを弾いているときだけ開放的になる。

その日の放課後、セレナがぼんやりと教室の外の壁に凭れ掛かっていると、戻ってきたノラと目が合った。ノラは微笑んで頷き、手を振った。それを見たセレナは驚きの余り、体が固まり、狂いそうなほどの喜びを感じて会釈をした。ノラは教室に入ると、リュックに荷物を片づけながらエリカと話し始めた。

「自惚れてはいけない！ノラのような優秀な人が私に興味を持つわけがないわ。ノラはクラスの中のもっと良い人と一緒にいるべきだ」

セレナは自分に言い聞かせた。



それから毎日、昼休みになると、セレナは秘密基地に行き、ミスエンジェルとお喋りした。ミスエンジェルはいつも親切で面白い。セレナは徐々に打ち解け、心を開き、会話は自然になった。そして笑顔と自信が顔に現れ始めた。セレナが毎日一番楽しみにしていたのは昼休みだった。二人の話は^うつきなかつた。

あるとき、セレナはミスエンジェルにノラと友達になりたいという願望について話した。ミスエンジェルは言った。

「君が何も持っていなくても、私はそばにいるよ」

「ミスエンジェル、なぜ、私と話すの？私はブ

スでつまらないと思わない？」

「そんなことないって。セレナは素晴らしいよ。ノラよりいいよ。もっと自信をもって」

「あ、そうだ。あと少しでノラの誕生日だよね？仲良くなりたいなら、誕生日におめでとうとか言ってみたら？」

「うーん、試してみるわ」

「がんばって。セレナならできるよ」

ミスエンジェルの言葉にセレナは勇気をもらった。

ノラの誕生日は五月だ。誕生日の前日、セレナは町の店で夕暮れまで悩んだ末、プレゼントにブレスレットを選んだ。帰り道、夜空



に星が煌^{きら}めき、流れ星が流れると、願い事をした。

誕生日当日、ノラはみんなに囲まれていた。ノラの為にバースデーケーキも用意されていた。自分がその場に不要な存在だと気づいたセレナは汗に濡^ぬれた包装紙^{ほうそうし}に包^{つつ}まれたプレゼントを手にし、一步も踏み出せず、途方^{とほう}に暮^くれて隅^{すみ}の方に立っていた。そして、それに気づいたノラと目が合った瞬間、恥ずかしくなり、プレゼントを持ったまま、その場から逃げ出し、一気に秘密基地に駆け上った。

息は切れ、頬は赤く燃えているようだった。灰青色^{はいあおいろ}の空から大雨が降ってきた。数え切れ

ないほどの^{あまつぶ}雨粒がガラスにぶつかり、海面を叩き続け、波を立てていたが、不思議と海も波も穏やかだった。それを静かに見ていたセレナはミスエンジェルに現れて欲しかった。

「大丈夫？」

と言いながらやって来たミスエンジェルにはセレナの^{いちもくりょうぜん}悩みが一目瞭然だった。

「ノラにプレゼントを渡さなかったの？」

「ええ。機会がなかったの。ノラはとても忙しくて」

セレナは自分の気持ちを打ち明け始めた。ミスエンジェルは^{かたむ}耳を傾け、ただただ話を聞いていた。



第四章 星

セレナはミスエンジェルに尋ねた。

「ミスエンジェルだったら何が欲しい？」

「私だったら^{マック}MACの口紅かな。何色でもいい」

「なぜ^{マック}MACなの？」

「人気があるから。みんないいって言ってるし、お金があったら必ず一本買うわ」

二人の関係は気づかないうちに変わっていた。

それから何日か経った週末、セレナはポイプビーチの石段に立って海を眺めていた。海は色とりどりで、浅い所と深い所の色合いが違う。波の音は^{せんりつ}旋律があるようでそうではない。海をじっと見つめていたセレナは、波の音に耳を傾け、初めて自然の力を感じることができた。

「今日の海はとても美しいね」

ミスエンジェルの声がセレナの耳に聞こえてきた。セレナは好奇心を^{おさ}抑えきれず、尋ねた。

「ミスエンジェル、あなたは誰？そろそろマスクを取ってくれない？」

「まだダメ」





ミスエンジェルは再び拒否した。

「エリカが言ったみたいに、私に優しくしないでいいんだよ。一緒にいたら、いじめられちゃうよ。もう来ないで。そうすれば、きっとたくさんの友達ができるよ」

セレナの話は止まらなくなった。

「自分のことをそんなふうには言っちゃだめよ！」

ミスエンジェルは真剣な口調で言った。

「ええと」

セレナはいったん話すのをやめて、話題を変えた。

「ミスエンジェルはどんな歌が好きなの？」

『『小さな星』。♪君は私の小さな星だ。空に掲^{かか}げて輝かせているー』

ミスエンジェルは歌い始めた。

「どうして好きなの？」

セレナが理由を聞くと、ミスエンジェルはセレナを見つめて言った。

「私、一人一人は空の星のようなものだと思う。一番輝いている星ではないけれど、弱い光で周りの人々を照^てらしているの。それで十分。みんな平凡^{へいぼん}だけど一つの星なんだよ」

「だから、セレナ、君もこの世界で唯一無^{ゆいつむに}二の存在なの。誰も君に取って代わることはできない！」





「ありがとう。そう言ってくれてありがとう」

セレナの声は感謝の気持ちでいっぱいだった。

「クラスメイトにずっとイジメられているなら、先生に言えば？」

ミスエンジェルは提案した。

「そんなことをしても無駄。先生だって、彼らを止められない」

セレナは無力^{むりょく}そうに答えた。ずっと前に試してみたが、イジメを悪化させるだけだと知っていたからだ。

第五章 ピンクのノート

数日たったある放課後、セレナは海岸線^{かいがんせん}に沿^そって散歩していた。カウアイ島は一年中蒸^むし暑い。爽やかで澄^すんだ水が潮の満ち引きによってセレナの両足^たを叩いている。

「セレナ、これプレゼント」

ミスエンジェルは後ろに隠していた物を差し出した。そこにはノートがあった。表紙はピンク色でアニメのイラストが描いてあり、と





でも女の子らしくて可愛い。

「セレナ、毎日の生活の楽しい思い出をこのノートに書いてみてよ。未来のあるときに振り返ってみれば、書いた意味が分かると思うよ。試してみて。でも、楽しいことだけね」

「やってみるね。ありがとう！」

セレナはノートを手にし、その日からノートは^{たからもの}宝物になった。

一日一日と過ぎていった。セレナは相変わらず毎日昼休みにミスエンジェルと秘密基地で遊んでいたが、まだノラと友達になりたいという気持ちがあった。ノートに^{つづ}綴る毎日の

ささ
細やかな喜びの^{ほとん}殆どは自分とミスエンジェ
ルのことだった。ノートは二人の物語を語っ
ていた。セレナは毎日肌身離さず^{はだみはな}ノートを持
ち歩いた。

^{またた}瞬く間に、一ヶ月が過ぎ、ノートの半分以
上が思い出の言葉で埋め尽くされた。

^{げし}夏至の日の音楽室で、セレナの右側にノラ
が座った。セレナの頭は真っ白になり、胸の
^{こどう}鼓動が聞こえ、^{がくふ}楽譜を持っている手は震えた。
喜びを抑えながらいつものように歌おうとし
たところで、自分の^{がくふ}楽譜をノラが見ているこ
とに気づいた。そしてそれは話しかけるチャ
ンスだった。





セレナは緊張を抑え、少し声を震わせながら聞いた。

「ノラさん、楽譜はどうしたんですか？」

「ええと、音楽室のどっかに置いてきちゃったみたい。あの、ちょっと…」

その口からは一緒に見たいという言葉が出てこなかった。

「じゃあ、一緒に見ましょう」

セレナは初めて人を誘ってみた。

「ああ。ありがとう！」

ノラは恥ずかしそうに笑った。二人の距離は楽譜の半分だった。楽しそうに話している間、二人はエリカが苦い表情を浮かべていたこと

に気付かなかった。

授業が終わると、セレナはノラにピアノへの憧れを話した。

「私は四歳からピアノを習い始めたよ」

ノラが答えたちょうどそのときに、エリカがやってきて、セレナを押しつけ、言った。

「友達がいなくて君！またノラに迷惑かけてるじゃない。邪魔なんだよ！」

エリカはノラの手を取り、立ち去った。セレナは黙って二人の背中を見送り、深く傷ついた。

セレナはその日の昼休み、秘密基地で必死





な顔でミスエンジェルにたず訊ねた。

「ねえ、私達は親友だよね？」

「もちろん！」

ミスエンジェルは躊躇ちゅうちよなく答えた。

「じゃあ、あなたは誰？」

セレナはミスエンジェルのマスクを取ろうとした。好奇心が頂点ちょうてんに達したからだ。ミスエンジェルは後あとずさりした。

「なんで？親友だったら、本当の姿を教えてください！あなたが誰なのか知りたかっただけなのに」

セレナが不愉快ふゆかいそうな口調で言うと、この一言がミスエンジェルを刺激した。声を荒あらげた

ミスエンジェルは不満を一つ一つセレナに投げつけた。

「本当の私を知らないのが一番いいことなんだよ。私がどんなに君と普通の親友になりたいのか知ってるの？でも、君と仲良くなれば、あいつらは私を孤立させるの！この間の放課後、君と一緒に帰ろうと校門の前で待っていたら、ライアンは先に帰ろうって言うし。君のことを面倒臭いなと思っているのよ」

「でも…」

「私があいつらにどれくらい君のいい所を言っているか、知っているの？」

ミスエンジェルはセレナに反論する機会をま





ったく与えなかった。

「ご、ごめんなさい」

セレナはささや囁くような声で謝った。目の中の光が弱まりうつ虚ろな気持ちに襲われながら、続けて言った。

「ミスエンジェル、もしも他の人の目が気になって私と距離を置きたいと思ったら、もう私の所に来なくてもいいよ」

「そういう意味じゃないよ...」

ミスエンジェルが言う前に、セレナは階段を駆け下りた。

窓の外は、今にも雨が降ってきそうな暗い空だった。すると、あん じょう案の定、放課後、小雨が

降ってきた。セレナは胸が詰まったような気
持ちになり、感謝と怒り、悲しみと恐れなど
が無数に織り交ざった感情に襲われた。そし
て気づかないうちに海沿いの崖まで歩いてい
た。旧暦の十五日に近づいているせい、そ
の日は偶々風が強かったからか、引き潮の流れ
は明らかだった。ひんやりとした風に顔を
撫でられ、心は侵食された。セレナは何かに
慰めて欲しくてピンクのノートを取り出し
最初から読み始めた。一文字も見逃すまいと
読みつつ、二人の友情について考えていた。

「ねえ！何を見ているの？」

エリカの声がした。





「何も見てないよ」

言い返したセレナはノートを閉じ、胸の前に抱えた。

「いい物はみんなに共有しよう！見せて！」
興味をひかれたエリカは無理やりセレナに迫った。

「だめ！これは私のものよ」

セレナは初めて他人の言うことを聞かなかった。

「うわー、何か秘密を隠そうとした？」

ノートを奪^{うば}われそうになったセレナは、友情を守るかのように、必死にノートを持ち放さなかった。

「お前はそんな物要らないだろ。みんなが困らないように早く渡せよ」

ライアンは言い、もう一人も言った。

「早く奪っちゃえ！セレナ、あんた^{どきょう}度胸あるね」

奪い合ううちに、ノートは海に落ちていった。



第六章 嵐の後の虹

「あ、私達のせいじゃないわ。あんたが手を滑らせて海に落としたのよ」

責任を回避しようとしたエリカに、ライアンも続けて言った。

「お前が早く寄越せば、こんなことにはならなくて済んだのに！俺らのせいにするなよ」

セレナは何も言わず、ただ彼らをじっと睨んで、次の瞬間、崖から海に飛び込んだ。心

の中にはただ一つの思いがあった。ノートは彼女にとって何よりも貴重な物で、ノート無しでは生きられないのだ。セレナは泳げないことさえ忘れていた。

エリカ達は、その行為に愕然とした。誰もが皆、ノートがそれほど重要であるとは思っていなかったのだ。そして、その場に立ち尽くし、セレナが波と格闘し、呻き声を上げているのをただ見ているだけだった。

「もうここから逃げないと、やばいことになるよ！」

と誰かが言うと、皆、一斉に逃げ出した。

海の中でセレナはノートをしっかりと胸に



抱えた。^{むすう}無数の波しぶきがセレナを取り囲み、
飲み込むように^{おそ}襲い掛かった。^{しおから}塩辛い海の水
が口と鼻に流れ込み、顔が^{なみま}波間に浮き沈みし
た。^{おおなみ}大波に襲われたセレナは力をなくし、そ
の意識は次第にぼやけていった。

波はセレナをポイプビーチに運んだ。^{いちめい}一命
を取り留めたセレナはノートを抱きしめたま
ま、口の中の苦味は海水なのか涙なのか分か
らずにいた。^{よわよわ}弱々しく目を開けると、^{もうろう}朦朧と
している目の前にミスエンジェルが立ってい
た。ミスエンジェルは、^{わかい}和解するためにビー
チへセレナを探しにやって来たのだが、その
状況を見て、すぐに自分を責め、^{ざいあくかん}罪悪感を覚え

た。セレナが落ち着くと、二人は海^{うみ}辺^べの石^い段^{だん}まで歩き、肩を並べて座った。

「びしょ濡れたね。大丈夫？体調はどう？着替える？」

ミスエンジェルが心配そうに尋ねた。

「大丈夫、元気よ。泳げないのを忘れていた」

セレナは答えた。

「エリカ達って本当に嫌だなー」

愛想が尽きたように言ったミスエンジェルは、深呼吸して続きを言った。

「昼食の時、少し言い過ぎた。ごめんね。セレナは、本当に私が誰かを知りたいの？」

「うん。でも教えてくれないでしょ」





セレナは真剣な顔をして言った。

「別にいいよ」

ミスエンジェルはマスクを脱いだ。セレナは自分の目が信じられなかった。

「ミスエンジェル。あなたは、ノラだったの？」

セレナの声は震えていた。ノラは頷いた。セレナは矢継ぎ^{やつ}早^{ばや}に問いかけた。

「どうして私と友達になりたいと思ったの？」

「ええと、どう答えたらいいか……。セレナは私と似ていたから。私が初めてこの学校に来た頃、イジメられて、みんな見て見ぬふりをした。私も密^{ひそ}かに我慢しながら耐えた。でも、

単なる言葉の虐めでも、これからは次の人に
そういうことをさせないと決心したの。私は
誰もがその人なりの魅力を持っていると信じ
ているよ」

ノラは^{すなお}素直に告白した。それはノラの心の中
の大きな傷だった。

「ノラもすごく苦勞したんだね！」

セレナはその痛みを理解した。

「ほら！虹だよ！」

ノラは、そう遠くない所にある^{なないろ}七色の光を指
差して叫んだ。

雨が止んだばかりで、太陽は雲を押し分け、





再び笑顔を見せた。その日の天気は、嵐の後の虹という二人の関係のようだった。

「すごい！本当に、すごくきれいだね！」

セレナは笑顔で言った。

第七章 友情の証

次の日に秘密基地で、
「渡してなかった誕生日プレゼント。はい、あげる」
セレナは、半月前にノラに贈るはずだった誕生日プレゼントを渡した。ノラが丁寧に包装紙を開け、中に入った箱を開けると、濃い緑色の翡翠が二つ付いたブレスレットがあった。
「すごい！可愛い！ありがとう、すごく好き」





ノラは喜びを抑えきれず、飛び上がった。そしてすぐにブレスレットを右手につけた。セレナは微笑みながらその様子を見ていた。ノラは見た目ほど冷たくもなく、かなり素朴な所がある。

「気に入ってくれて良かった」

セレナは、ノラの首元にある四つ葉よつばのネックレスに気が付いた。ノラは、それが母からもらったもので、四つ葉こううんのクローバーは幸運のしるしだから、生まれてから一度もはずしたことはないと説明した。そして、ネックレスをはずしてセレナの首にかけた。

その日から、二人は一緒に買い物をし、一

緒に遊び、一緒に食べ、一緒に遊園地に行った。もう隠すことはない。

二人はある日、エリカと街でばったり会った。

「ノラ、あんた、本当にセレナと仲良くなったの？」

エリカは驚いた表情をして言った。

「うん！」

ノラは大らかに答えた。

「そいつ、変だと思わない？」

エリカは挑発した。

「セレナは君たちが思ってるほど悪くないよ。」





もっと仲良くしてよ」

ノラは力強く言ってセレナの手を繋ぎ、その場を離れた。ノラはずっと自信に溢れた様子だった。

一緒に公園をぶらぶらし、喉が渴いたらスターボックスで飲み物を飲む。セレナは自分の好きな飲み物であるレモン^{ゆず}柚子ティーを頼み、お茶の^{にがみ}苦味が苦手なノラはジュースだけを注文する。セレナはノラにいつかレモン^{ゆず}柚子ティーを試すように言った。

ピンクのノート、二つの翡翠がぶつかるサクサクした音、明るい四つ葉のクローバーが二人の友情の証明だ。夕方、雲はオレンジ色

に染まった。夕日の^{ざんこう}残光が二人の体と髪を輝かせた。空気の中にはココナッツの香りが^{ただよ}漂っていた。

「私たち、私たちはいつまでも仲良しよ！」

そう言って、ノラはセレナを抱きしめた。

「私もずっとセレナと友達になりたかったの！」

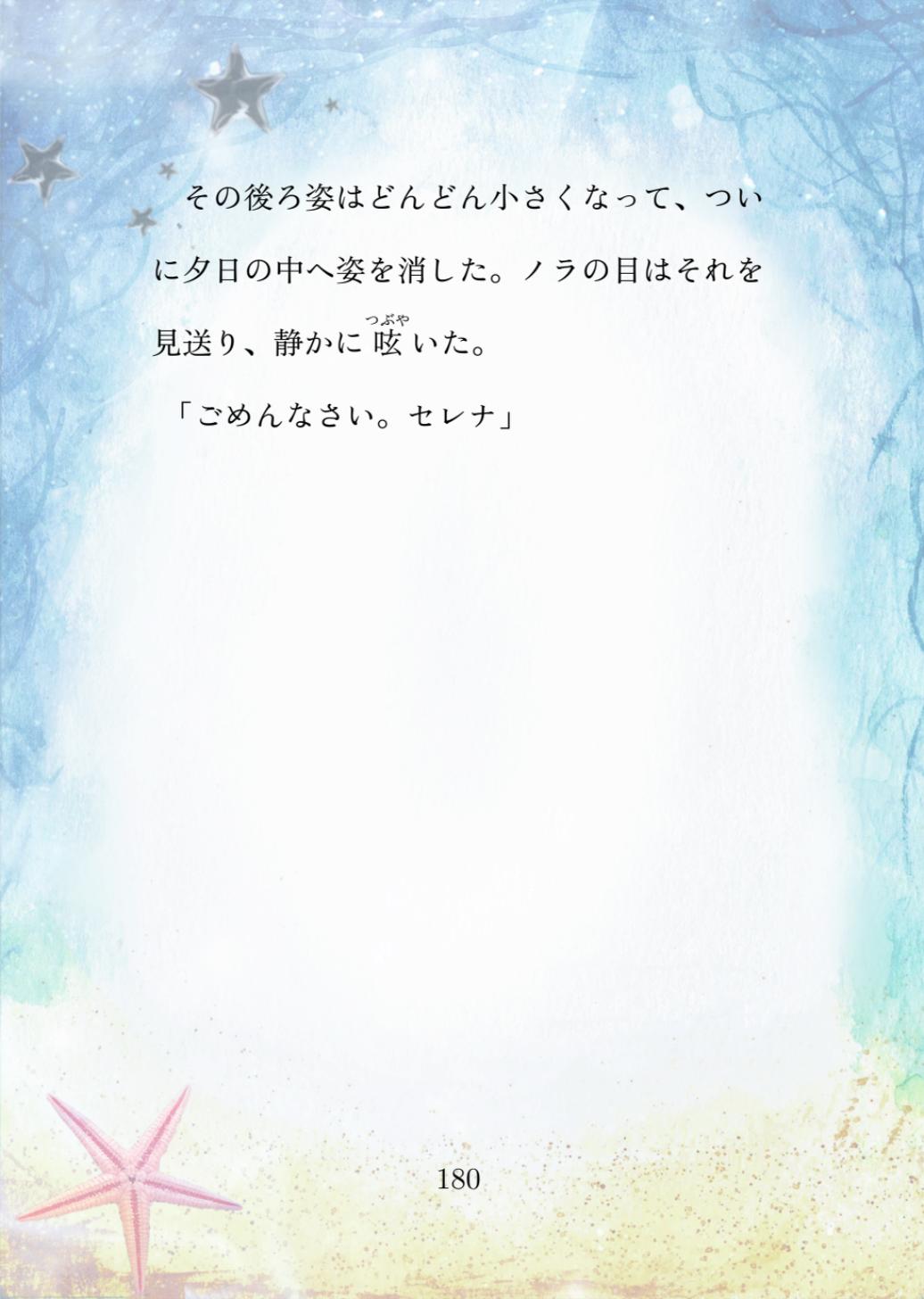
」

セレナの喜びはもはや言葉では表現できない。いつも友達になりたいと思っていた人が、密かに同じ機会を探していたとは思ってもいなかった。

「また月曜日に会おう」

とセレナは普通の友達に言うように言った。



The background is a soft, blue-toned illustration of a night sky. It features several stars of varying sizes, some with a subtle glow. The sky is filled with a fine, sparkling texture. In the bottom left corner, there is a large, detailed illustration of a pink starfish. The overall mood is serene and dreamlike.

その後ろ姿はどんどん小さくなって、ついに夕日の中へ姿を消した。ノラの目はそれを見送り、静かにつぶやいた。

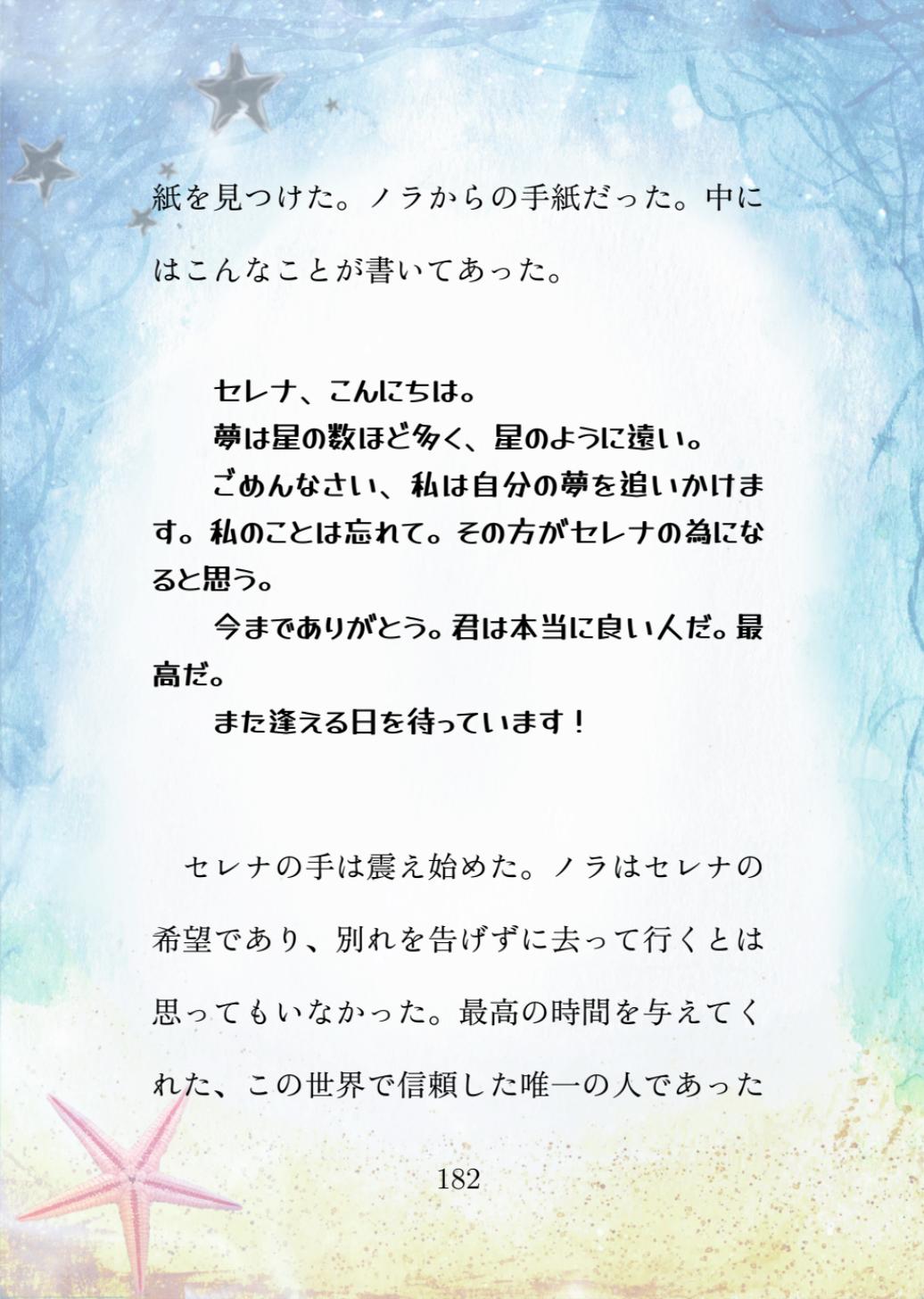
「ごめんなさい。セレナ」

第八章 十年にわたる手紙

セレナに予期しないことが起きた。ノラは次の月曜日、学校を欠席した。そして、火曜日、水曜日、木曜日、その次の日もずっと、学校の何処にも姿が見当たらなかった。最初、ノラは単に休んでいるだけだと思った。しかし、彼女はまるでこの世界に存在しなかったかのようにセレナの生活から消え去った。

ある日、セレナは秘密基地の階段の端^{はし}で手





紙を見つけた。ノラからの手紙だった。中にはこんなことが書いてあった。

セレナ、こんにちは。

夢は星の数ほど多く、星のように遠い。

ごめんなさい、私は自分の夢を追いかけます。私のことは忘れて。その方がセレナの為になると思う。

今までありがとう。君は本当に良い人だ。最高だ。

また逢える日を待っています！

セレナの手は震え始めた。ノラはセレナの希望であり、別れを告げずに去って行くとは思ってもいなかった。最高の時間を与えてくれた、この世界で信頼した唯一の人であった

のに、その全てを容赦なく奪い去った人でもあった。セレナの世界は崩れ去った。体の細胞の一つ一つに痛みを感じ、言葉にできなかった。

セレナは手紙をピンクのノートに挟み、急いで学校を出て、狂ったように町の通りを走り抜けた。立ち止まりたくなかったのだ。潮風は海の塩辛い匂いを運び、二人が残した思い出はいたる所に見られた。

水晶のような涙が目から溢れ、頬を滑り、地面に流れ落ちた。次の瞬間、まるで空も悲しみを感じているかのように、雨が降り出した。煙雨だったが、ずぶ濡れになった。切れ





た糸から落ちたビーズのように、涙は大粒で
途切れなく落ちた。

「ビービー」

と後ろからした警笛けいてきの音にセレナは気付かなか
った。

「ゴロゴロ…。バーン」

耳を劈つんざくような雷の音と共に、スピードを
出して走ってきた車がセレナの所へ突っ込こんだ。
だ。交通事故だった。

セレナは倒れ、稲妻いなずまが空を照らした。泣き
声は徐々に小さくなり、雨の音と微かすかな呼
吸がそれにとって代わった。雨水あまみずに流された
紫陽花あじさいが川のようにセレナを取り囲み、まる

で慰めるようだった。彼女はピンクのノートを最初から最後までしっかりと持っていた。

救急車のサイレンの音が鳴り響いた。

病院でセレナは目を開けた。両親はセレナの病床の側に立っていた。しかし、セレナは何が起こったのか覚えていないようだった。

「セレナさんは選択的健忘^{けんぼう}で、いくつか記憶を失っている可能性があります。なくした記憶は辛い記憶かもしれませんし、ショックを与える記憶かもしれません」

医者は言った。

「じゃあ、思い出せるようになるんですか？」





セレナの母親は心配そうに尋ねた。

「将来、何らかの刺激を受けたときに、思い出
すかもしれませんが、永遠に思い出せないこ
ともあります」

医者はそう話し、去って行った。父親は母親
の肩に腕^{うで}をまわし、

「娘が忘れたがっているのであれば、私達はそ
れを尊重しよう」

と言った。両親はセレナがしっかりと胸に抱
えていたノート^{たな}を柵の隅におき、何事もなか
ったかのように振^ふる舞^まった。

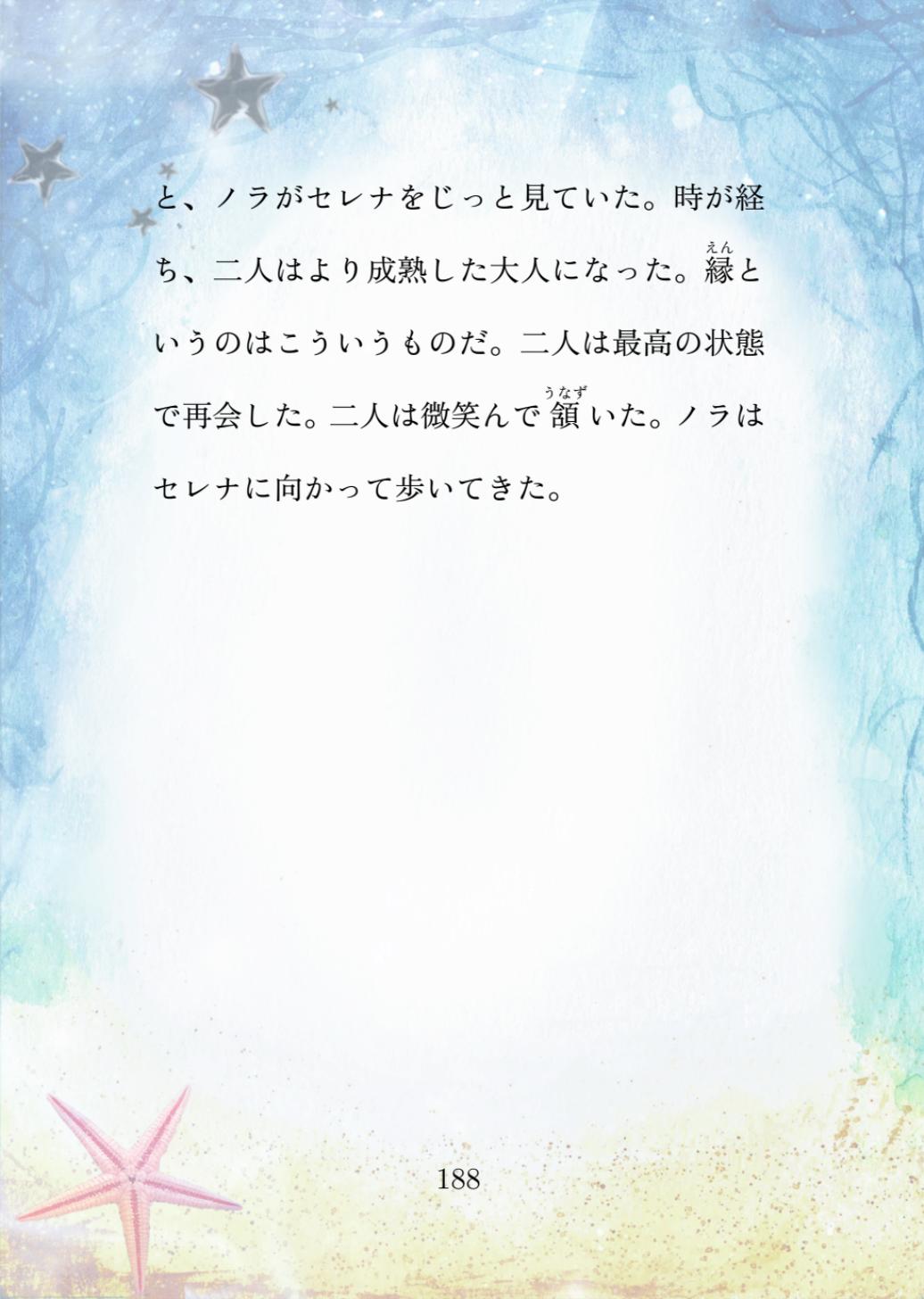
セレナは退院後、ミスエンジェルとノラ
のことをすっかり忘れてしまっていた。家族は

セレナを連れ、この悲しい場所を去り、新しい土地で新しい生活を始めた。しかし、セレナは常に自分が何か重要な思い出を失った感じがしていた。彼女は探し続けた、ずっとずっと。

あっという間に十年が経った。美しい女性に成長したセレナは両親からピンクのノートのことを聞き、それを読んだ。そして、かつての故郷を訪問することに決めた。

今、この懐かしい町で、懐かしい顔を見て、記憶が次々に蘇^{よみがえ}ってきた。セレナは全てを思い出した。あの平凡^{へいぼん}でない記憶。気が付く





と、ノラがセレナをじっと見ていた。時が経
ち、二人はより成熟した大人になった。縁^{えん}と
いうのはこういうものだ。二人は最高の状態
で再会した。二人は微笑^{うなず}んで頷いた。ノラは
セレナに向かって歩いてきた。